SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

地域課題に取り組むアートによる教育活動Ⅰ：東静岡アート&スポーツ／ヒロバでのフィールドワークを通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 名倉, 達了 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025367

地域課題に取り組むアートによる教育活動Ⅰ
－東静岡アート＆スポーツ／ヒロバでのフィールドワークを通して－

Educational Activities Using Art to Engage with Local Problems Ⅰ
Fieldwork at Higashi Shizuoka Art & Sports / Hiroba

名　倉　達　了
Tatsunori NAGURA

（平成29年10月2日受理）

はじめに

地域創造学環は平成28年度から始まった静岡大学の新たな教育プログラムであり、１年生後期から静岡県内各地で取り組むフィールドワーク（以下、FW）を大きな特徴としている。この内、筆者が担当する東静岡地区では、JR東静岡北口の東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ（以下、ヒロバ）を主な活動拠点として、約10名の学生がFWを行ってきた。近年、世界的なアートの動向として地域社会に介入する創作活動や展覧会が興隆し、我が国においても地域課題に向けた様々なアート活動や地域社会における国際芸術祭が数多く展開されている。本論では、地域社会における国際芸術祭の事例を挙げながら、平成28年９月から約１年間に取り組んだ東静岡地区の賑わいの創出を目標としたFWを纏め、アートを介した魅力的な地域社会の創造や地域課題の解決に取り組む人材育成に向けた、同地での教育活動の成果と課題について考察する。

１．地域とアート

（１）社会に開かれるアート

本論で扱うアートとは、西洋美術に端を発する美術表現を指す。おおよそ、19世紀のヨーロッパで始まったアヴァンギャルドに前後して、アートは一般市民の創造行為へと徐々に拡張し、社会を生きる人々の想いを反映する表現を内包するようになった。その後の科学技術の進歩や世界的な大戦等によって人々の価値観や生活環境が大きく変化すると、アートとして表現される題材や用いられる素材は既存の芸術概念から逸脱していき、様々な方法で社会へと浸透していった。第二次世界大戦以降にはアメリカを中心に、より自由な表現方法が興隆する。例えば、アートをアートとして担保していた展示スペースを飛び出したパフォーミング・アートやランド・アートなどは表現の舞台を街中や自然のなかへと移し、アートを実質的に社会へと開いた。様々な主義主張が叫ばれる現在、アートにおいて世界的な動向の一つとして挙げられるのは、ソーシャリー・エンゲイジド・アート（以下、SEA）である。これは、冷戦終結以

降のグローバリゼーションの台頭や、宗教や人種、経済や国家といった現代社会の日常的課題に対する取り組みであり、日常とアートの関係性やアーティスト自らの存在意義を探るべく盛んに繰り広げられている。社会的相互作用が不可欠なSAEにおいては、対話、協働作業、コミュニティの構築など、アートが社会を構成する人々と深く関わり、その関係性を問う試みがなされている。

（2）日本における地域課題に取り組むアート

我が国においても実験的なSEAをはじめ、様々な形でアートが社会へ開かれている。90年代には具体的な地域課題へ向けて行政が主導するアートの取り組みが見られるようになった。例えば、1994年に東京都立川市の米軍基地跡地の再開発によって誕生したファーレ立川は、「基地の街」から「文化の街」への変容を掲げる市のために、アートディレクターに北川フラム（1946-）を迎え、アートを礎とした街づくりが行われた。このプロジェクトでは作品を鑑賞物として街中に設置するだけではなく、国内外の著名なアーティストの作品がベンチや換気口など街の機能を持って設置された。こうした、いわゆる野外彫刻と異なる作品の都市部への介入に加えて、2000年代には地方の過疎化や高齢化といった地域課題に向けた国際芸術祭が開かれるようになる。特に北川がディレクションを務める新潟県十日町市と津南町を舞台にした「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」や瀬戸内海の島々で繰り広げられる「瀬戸内国際芸術祭」は、国内外のアーティストによる滞在制作や多くの鑑賞者の訪問によって、アートを介したソフトとハード双方の地域資源の発見や異文化交流などを促し、地域の活力を取り戻している。

こうした大型の地域国際展とヒロバでは予算規模も事業の背景も異なるが、東静岡地区の賑わいの創出という観点から見れば参考になる事柄は多い。二つの展覧会の報告書を参照すると、作品鑑賞の場を設けるだけではなく、地域住民、アーティスト、来場者が協働作業やワークショップなどアートを介した様々な交流ができる場を創出することが成功の鍵になっていることがわかる。また、これらの積み重ねによって積極的に参加する住民が増えていることも明らかになっている。結果的に伝統文化や自然環境などの地域資源を来場者に伝える役割や、展覧会期外にもボランティアで作品や会場の管理を担う例は多く見られる。

更に、国際的に活躍しているアーティストではなく、大学の研究室単位や有志によって制作されている作品やプロジェクトがある。例えば、日本大学芸術学部美術学科教授の鞍掛純一（1967-）と学生有志による《脱皮する家》（2006）や《コロッケハウス》（2009）は、「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」のために過疎化が進む山間地に通って制作された。数十年も放置されていた建物がアート作品へと変貌を遂げる過程では、学生と地域住民が交流し相互に新たな体験や学びが生まれたに違いない。何故なら、その後に続く《やまのうえした》（2012）では、一方的な作品作りだけではなく、地域住民と交流し、地域課題や地域資源をより深く理解しなければ成功しないであろう、祭り、運動会、農作業といった集落の暮らしと関わるコミュニティ・デザイン・プロジェクトを展開している。

2．地域創造学環とフィールドワーク

（1）地域創造学環におけるフィールドワークの目的と方法

静岡大学地域創造学環は平成28年４月から始まった新たな教育プログラムであり、従来の学

部の枠組みを超えた幅広い教養と高い専門知識の習得、地域（フィールド）での学びを大きな特徴としている。地域創造学環には、地域経営、地域共生、地域防災、アート＆マネジメント、スポーツプロモーションの５つのコースが設けられ、１年生後学期から始まるFWと地域創造演習を中心に地域の課題を解決するために必要な知識や技術を段階的な学びのステップで習得していくことを目的としている。

平成28年度後期のFWは学生たちが都市部と山間部など異なる場の性質を経験するために、県内14箇所の内、２箇所を選択してそれぞれに３回以上のFWを行い、平成29年度からは基本的にフィールドを１カ所に絞っている。また、異なるコースの学生が協力して課題に取り組む方針のために、全体のバランスと学生の希望を鑑みてフィールドの振り分けが行われた。各フィールドは行政担当者や地域住民の協力を経て事前に大まかな課題調査を行い、FW委員会と各担当教員が調整し学生の受け入れ態勢を整えた。尚、学生たちには新たに作成されたFW実施マニュアルを用い目的や方法、マナー等を学ぶ機会を設けた。講義では各地域の窓口となる方々を招いて地域の様子や取り組みを紹介して頂き、いくつかの地域では事前視察を行った。更にフィールドごとの事前・事後指導、コースごとの地域創造演習、レポート作成によって学びを深める体制をとり、FWには教員が同行して、学生と地域住民や行政職員との間を繋ぎながらアドバイスや指導を行った。

（２）東静岡地区におけるフィールドワークの概要

図１　ヒロバの下見

図２　静岡市担当者からのレクチャー

東静岡地区のFWはアートやスポーツによる賑わいの創出を目標としている。これに向けて平成28年度後期に５回、平成29年度前期には６回、主に幅広い教養や知識を身につけることと、地域社会の課題を調査・発見することを目的として取り組んだ。初年度に学生たちは２カ所のフィールドを選択していたが、他のフィールドでは街歩きや住民への聞き取り調査をおこなうケースが多かった。これを踏まえて、東静岡地区では地域におけるアートの取り組みを体験し、その幅広い知識をつけること、グランドオープンを翌年に控えたヒロバの整備計画を通して地域課題の一端を知れるように、同地を含む市内複数の会場で行われた「めぐるりアート静岡」（以下、「めぐるり」）の鑑賞やイベントへの参加、ヒロバの整備を行う静岡市担当者からのレクチャーや意見交換を行った。

平成29年度前期は専門的な知識の拡充を図ると共に地域の課題をより具体的に知り、今後の取り組みの礎となる情報を獲得することを目的とした。ヒロバのグランドオープンイベントへ

の参加、地域課題に取り組む専門家と地域住民によるレクチャーや対話、共同作業を行った。

1）平成28年度後期の取り組み

① 10月 JR東静岡北口の市有地（ヒロバ整備予定地）の下見。
② 11月「めぐるり」の全会場（ヒロバ、静岡市美術館、静岡県立美術館、旧マッケンジー住宅、中勘助文学記念館）の鑑賞。
③ 11月「めぐるり」で開催されるアーティスト・トーク、ワークショップを選択して参加。
④ 12月「めぐるり」運営会議へオブザーバーとして参加。
⑤ 1月 静岡市市役所担当者によるヒロバの整備概要の説明と意見交換。

2）平成29年度前期の取り組み

① 5月 ヒロバのグランドオープンイベント、コンテナアートベースのペイントワークショップ、ローラースポーツ大会やその他イベントへの参加。アンケート調査の実施。
② 7月 ヒロバの委託管理会社H.L.N.Aと静岡市ローラースポーツ連盟による、ヒロバ、ローラースポーツ連盟における取り組みの解説。
③ 7月 静岡県立美術館川谷学芸員による地域における美術展の解説。
④ 7月 用宗の地域課題に取り組む仁科氏による、スポーツと食のイベントについての解説。
⑤ 7月 東静岡長沼地区会長さんとの顔合わせ、地域についての解説。
⑥ 9月 H.L.N.A及び長沼地区町内会長と学生企画ワークショップの準備作業。

（3）東静岡アート＆スポーツ/ヒロバと「めぐるりアート静岡」

図3　整備後のヒロバ

図4　「めぐるりアート静岡」運営会議への参加

ヒロバは屋内施設を含むローラースポーツゾーンの他に、アート展や様々なイベントを行う芝生ゾーンと駐車場兼イベントゾーンから成る。この土地は旧国鉄貨物駅跡地で1993年から94年にかけて市が取得し、市庁舎などの建設計画の立案と見直しが繰り返され手付かずの状態が続いていた。その後、市の東静岡地区の整備方針やローラースポーツ団体の意見により、市民が気軽に立ち寄れ、地域の活性化や文化、スポーツの発信拠点となるべく、2020年の東京オリンピック・パラリンピックまで暫定的に整備される。FWを始めた平成28年度末から平成29年度始めにかけて工事が行われた。

「めぐるり」は、「アートを媒介に、静岡の過去と現在、場と人を結ぶ術を考える」ことをテー

マに、平成25年３月に開催された「むすびじゅつ」を発展的に継承したアートの展覧会である。同年から平成27年度までは静岡大学で開講した「アートマネジメント力育成事業」の一環として企画されてきた。FWとして参加した平成28年11月の開催回からは、静岡市と（公財）静岡市文化振興財団が主催者として加わり、ヒロバの整備予定地や旧マッケンジー住宅、中勘助文学記念館が新たな会場に加わった。本展の特徴は、静岡市内の大学教員や美術館学芸員などが静岡にゆかりのある作家を中心にキュレーションを行い、市内各地の会場で開催する点である。

３．東静岡地区のフィールドワークの検証

（１）フィールドワークに取り組む姿勢

図５　ワークショップ風景

図６　ローラースポーツ施設の見学

平成28年度後期のFWは11名が東静岡地区に振り分けられ10月から始まったが、この月は学生たちがフィールドを選択する時期でもあり、11月は部活動の大会や大学祭と重なって休日の参加が難しい場合があった。また、２つのフィールドを振り分けられたことにより、必ずしも東静岡地区やアートに関心、興味のある学生が取り組んだわけではなかった。こうしたことからもこの時期の東静岡地区のFWでは全員が「めぐるり」を通して、地域課題に取り組むアートを十分に経験することは難しかった。しかし、学生たちにはできるかぎり会場やイベントに足を運ぶ姿が見られ、アートの鑑賞経験が乏しい学生も新たな発見があったことが事後指導でも分かった。ヒロバを整備する静岡市の担当者からの解説と質疑応答においては、ヒロバや地域に関する質問やアイデアを積極的に発言する学生の姿勢が見られた。

平成29年度前期の活動は、前年の２カ所のフィールドから東静岡を希望する10名の学生が選択したこともあり、ヒロバのグランドオープンイベントであるコンテナアートベースのペイントワークショップへの参加姿勢はあいにくの天候でありながらも良好で、市の担当者からも好印象であった。また、スポーツや食に関するレクチャーにおいては、多くの学生に積極性が見られた。８月からはそれまでのFWの内容を踏まえて、学生たちが後期に取り組む活動について自主的に授業時間外で話し合いがおこなわれた。その結果、10月から11月にかけておこなわれる「めぐるり」のひとつのイベントとして、ヒロバの会場で学生たちが企画したワークショップが開催されることとなった。そのために、学生たちが地域住民やヒロバの管理会社の職員にお願いし、ワークショプで使う物品や作品の作成を共働で行ったが、この活動に向けた準備期間が夏休みであったことから学生のなかでモチベーションの差が生まれている。

これらを踏まえ、FW後に提出されたレポートから学生たちの気付きや学びを要約すると次

のようになった。

（２）平成28年度後期の学び

① 美術の展覧会に足を運んだ経験にばらつきがあるが、様々な会場をめぐる事で、市内の文化施設の魅力を知り、作品を鑑賞すると興味を惹かれる作品があった。
② わかりにくい作品や会場へのアクセスの難しさ、来場者の少なさや広報への疑問が残った。
③ 今まで知らなかった展覧会を企画、実施するプロセスを知ることができた。
④ 静岡市によるヒロバの整備計画を知り、地区の課題や今後の取り組みのイメージが湧いた。

（３）平成29年度前期の学び

① ワークショップで共同作業によって作品を描く楽しさや屋外イベントの難しさを考えた。
② ローラースポーツイベントの魅力や集客力を知ることができた。
③ ローラースポーツを取り巻く環境や静岡での状況を知ることができた。
④ 地域における美術展の意義や企画者の問題意識を知ると共に、アートの知識不足を補うためにたくさんの展覧会に足を運びたい。
⑤ マルシェやスポーツイベントによる賑わいの創出の可能性を知り、東静岡地区での応用を考えた。
⑥ 東静岡長沼地区の特徴や歴史、地域の代表者の方々の思いや求められていることを知り、今後の取り組みについて具体的に考えるきっかけになった。
⑦ 地区の方々との共働作業を通して、様々なお話をすることができた。また、作業の段取りや準備の大変さを学んだ。

４．教育活動の成果と課題

FWに取り組む姿勢やレポートから学生たちの気付きや学びを纏めると、約１年間の活動を通して幅広い知識を得ていることが分かり、事前・事後指導の様子も含め徐々にではあるが主体的な姿勢に変化してる様子が伺える。平成29年度前期の後半には、授業時間外でも意欲的に活動する学生も現れた。これは、ヒロバが完成し、オープニングイベントに参加することで今後の取り組みに向けた意欲や具体的なイメージを得たことが特に関係していると考えられる。イベント当日は悪天候で、急遽取り付けた仮設テントの下でのコンテナのペイントワークショップ作業は難しく、予定していた来場者へのアンケートも予定通りには行えなかった。しかし、こうした予想外の、ある意味エキサイティングな状況であったからこそ、屋外におけるイベントの困難さを実感すると共に、共同作業によって大きな作品を生み出すことの喜びや楽しさを強く印象づけたことが、その後の学生たちの発言や姿勢からも見受けられることができた。また、アートやスポーツの分野で地域課題と向き合う専門家からのレクチャーによって、これまでに静岡市で行われて来た地域課題に取り組むイベントの目的意識や内容、課題を知り、自らに不足している知識や経験を実感することができたと思われる。そして地域住民との交流では地域の様々な情報を得られた。今後の東静岡地区のFWは継続してヒロバを活動の中心としながらも、課題解決に向けて範囲を広げた調査、分析を予定している。その足がかりとして東静岡長沼地区の町内会長数名から地区の歴史や文化、人口年齢の特徴をお聞きし、今後取り組んで欲しい内容も伝えられた。こうして、学生が地域により深く関わるための礎が築かれ始

めると共に、同地のFWにおける教育活動の課題が明らかになってきた。

最も切実な課題は、専門的な知識の不足である。これは、地域創造学環のFWが開始される前から予測できていたが、最低限度の専門的な知識の不足は情報の取得とその理解の質に大きく関与しており、与えられる情報が他のどのような事象と繋がっているのか、またどのような可能性を持っているのか分析する力にも大きく影響している。アートの知識という観点では、専門の文献を調べること、展覧会やイベントに足を運ぶようにFW初期から繰り返し指導してきたが、積極的に取り組んでいる学生でも十分とは言えない。例えば、先に挙げてきたような地域課題に取り組むアートの活動をリサーチしていれば、町内会長数名からのレクチャーで得た地域の歴史や文化が地域課題に取り組むアートにおいて非常に重要な要素であること、地域課題を解決する可能性を秘めていることが理解出来るはずである。しかし、事後指導においてその理解が十分でないことが分かった。

おわりに

FWにむけた事前・事後指導において、地域課題に取り組むアートの事例とその歴史的、理論的背景をより丁寧に伝える必要が明らかとなった。そして、こうしたアートは一過性のイベントだけではなく、地域住民との対話や協働作業を重ね新たなコミュニティを構築しながら地域課題と継続的に向き合うことが重要である。そのためにも様々なアートプロジェクトや作品を実際に体験、鑑賞することや授業を通した機会の提供が求められる。

また、東静岡地区のFWにおいては、FWそのものの知識や経験と共に、スポーツに関する知識も拡充する必要がある。これらはアートには含まれないようにみえるが、現代の多様性を極めるアートにおいて、特に地域課題に取り組むSEAをはじめとするアートプロジェクトやその過程において頻繁に取り上げられる重要な要素であり、領域を超えた指導者の連携が必要である。

今後もアートを介した魅力的な地域社会の創造や、地域課題の解決に取り組む人材育成にむけて、東静岡地区の特性を活かしながらFWをもとに考察を重ねたい。

参考文献

北川フラム（2010）『大地の芸術祭〈ディレクターズ・カット〉』角川学芸出版.

北川フラム（2014）『美術は地域をひらく　大地の芸術祭10の思想』現代企画室.

北川フラム他（2016）『瀬戸内国際芸術祭公式記録集』瀬戸内国際芸術祭実行員会・北川フラム監修,現代企画室.

柳澤有吾（2017）『パブリックアートの現在　屋外彫刻からアートプロジェクトまで』かもがわ出版.

パブロ・エルゲラ（2015）『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』（秋葉美知子、工藤安代、清水裕子）フィルムアート社.

坂本有理・ほか編（2015）『アートプロジェクトのつくりかた「つながり」を「つづける」ために』森司監修,フィルムアート社.

大地の芸術祭実行委員会（2016）「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2015総括報告書」〈http://www.city.tokamachi.lg.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/4/daitinogeijyutusaihonpensyusei.pdf〉2017年9月3日アクセス.

瀬戸内国際芸術祭実行委員会（2017）「瀬戸内国際芸術祭2016 総括報告」〈http://setouchi-artfest.jp/seto_system/fileclass/img.php?fid=press_release_mst.20170217195217a6457f2b91cb302fa36db1fae1083e73〉2017年9月1日アクセス.